

本をどう読むか —読書術を知り、熟達した読書人を目指す—

脇田里子

要旨

学部留学生を対象にした日本語のリーディング科目では、文章の読解が中心で、読書を学ぶ機会が少なく、知識や情報を収集するために、本1冊をどう読むかという情報読書の指導がほとんどなされていない。本稿では読書の意義や読書の方法に関する読書論を示し、日本語科目における読書教育に応用する可能性について述べる。読書の意義については、読書を通じて知識を身につけることが、自分の人生を切り拓くことにつながることを述べる。読書の方法については、本文を読む前の技術、読書中の読むスキル、読書後の知識のアウトプット方法、読書時間などの観点から述べる。例えば、読書前には読む目的を設定する、読書中には記者が取材をするように能動的に質問しながら文章を読むことを示す。

キーワード

読書、読書教育、読書術、情報読書

1. はじめに

読書を指導することは難しい。いつ、どこで、どの本を、どう読むのか、また、なぜ本を読むのかについて指導することは簡単ではない。そのために、どのように本を読んだらいいのか、そして、なぜ本を読むべきなのかについて、読書論や読書術について書かれた書籍の中から筆者が興味深いと判断したものを示す。本稿は日本語教員が読書指導をする上で、読書の意義を再確認し、読書の技術を知る一助になることを目的とする。

日本語のリーディング科目は文章の「読解」が中心で、「読書」の方法について学ぶ機会は多くない。例えば、多読を目的としたリーディング科目において、学習者は自分が読みたい本を選び、自由に読むことが多い(栗野他 2012)。このように、日本語学習者は大学でレポート執筆のために、参考文献の書籍を読むように言われても、1冊の本を読む技術について指導される機会はほとんどない。そのため、学習者が本を最初から最後まで読んでも、自分のレポートで根拠として引用すべきところがどこかわからない、あるいは、最初から本を読むことを諦め、インターネットの情報だけからレポートを作成することがよく行われる。以上のような読書をめぐる日本語学習者の状況を鑑みれば、日本語のリーディング科目においては、読解指導に加え、読書指導も行う必要があるだろう。

それでは、本はどのように読んだらいいのだろうか。娯楽として読む本は、自分の好きなように自由に読んで構わないであろう。しかし、知識を得るために読む本については、本を読む技術があるように思われる。多くの本を読んでいる読書家は、本を読むうちに自然に身についた最適解の読書術をもっている。読書家一人一人によって、その読書術は異なるが、共通点も見られる。具体的な読書術に関する記述は学術的研究よりも、一般的

社会人を対象にした一般書に多く見られる。実際、本屋の新刊書や話題の本のコーナーには、一般の社会人を主な対象にした読書術の指南書が数多く存在する。それらの書籍には、1 か月に 100 冊以上読むという会社経営者、作家、大学教員などの読書家によって著され、限られた時間の中で、必要な情報や知識を得るための読書術が記されている。本稿では、筆者がそれらの書籍の中からアカデミック・リーディング (Academic Reading; 以下 AR と略す) の読み方として応用可能と判断した読書術を紹介する。そして、学習者がそれらの読書術を駆使し、熟達した読書人になるための一助になることを目指したい。なお、2 章で詳述するが、本稿で述べる AR は読解ではなく、主に情報収集を目的にした読書を指している。

次に、なぜ私たちは読書をするのだろうか。いや、読書をすべきなのだろうか。昨今、ライフスタイルの変化により、本を読む時間よりも、インターネットから情報を得る時間が圧倒的に長くなっている。読書の意義を理解しておかなければ、ますます本を読まなくなるだろう。以上のような問題意識に基づき、本稿では、上述した読書術の指南書の著者らが本を読む意味や意義をどのように見出しているかについても言及する。

本稿の構成は次の通りである。2. で分析対象とする読書について、3. で読書の意義について述べ、4. で具体的な読書術を紹介する。最後に、5. で結論を述べる。

2. 分析対象とする「読書」

“Reading” には「読解」と「読書」の 2 つの意味がある。「読むこと」の学習には、「学習的」「分析的」といった意味合いをもつ「読解指導」の側面と、「生活的」「総合的」といった意味合いをもつ「読書教育 (指導)」の側面がある (八木 2019, p. 169)。日本語教育における AR では、主に「読解指導」は行われているが、「読書教育 (指導)」はあまり扱われていない。

読書に関する学術的な研究分野には「読書科学」があり、読者の内面的な認知活動として展開している心理的過程についての研究が進んでいる (塚田 2014, p. 30)。この読書科学分野において、「読む」ことは次の 3 段階に分けられている。

<「読む」ことの 3 段階> (塚田 2014, p. 33)

①字面の読み：文字を記号と認知して、これを意味化する段階。

②文章理解の読み：「字面」を突き抜けて、まとまった意味内容を受け取る段階。文字・単語・文・段落・文章といった単位におけるより深い理解が求められる。学校の国語の授業で習得する。

③読書の読み：本をどう探るか、1 冊の本をどこからどう読むか、本から受け取ったことを自分の経験や価値判断を通して受け止めなおす段階。

①～③の読みは、「字面」から「文章」、「文章」から「本」へと連続した「読み」の段階であり、明確に区別することは難しい。②は語学の授業で行う「読解」に該当する段階である。③の段階は、基本的に学習者に任せられ、どのように読んでいるのか学習者自身も明確に認識していないことが多いようだ。本稿では、主に、③読書の読みを対象に有効な読書術を検討したい。

読む目的に応じて、読書は次の A)～C) の 3 つに分類される。

<目的別読書の分類> (塚田 2014, p. 21, p. 144)

A) 娯楽読書：娯楽のために行う趣味として気楽に楽しむ読書

B) 情報読書：実用目的で知識や情報を収集するために、文献や資料を目的に応じて、
取捨選択する読書

C) 教養読書：真理探究のために、例えば、哲学書を読んで人生について考える読書
もちろん、A)～C)の読む目的を区別せず、娯楽と教養を兼ねて読む場合もあり得る。本稿
では、A)の娯楽として読む小説などのフィクションは対象にせず、B)やC)のノンフィク
ションを対象にした情報収集や教養を目的にした読書を対象にする。

また、読みに関する用語は、本を読む速さや量、ストラテジー、読みの深さ、読む際の
音声の有無、他人との読みの共有という着目点の違いによって、次のように分類できる。

<読みに関する用語の分類>

a) 読む速さや量、ストラテジー：速読、超速読、高速読書、遅読、多読、乱読、スキ
ミング（要約読み）、スキヤニング（情報検索読み）

b) 読みの深さ：味読、精読、熟読、批判的読解

c) 音声の有無：音読、黙読

d) 読みの共有：ピア・リーディング、輪読、読書会、ブック・クラブ

本稿で対象にする②情報読書や③教養読書に関する指南書は、a)の「速読」や「多読」
といった言葉を冠する題名を伴うことが多い。そのため、速く本を読むことや多くの本を
読む技術について述べる。b)読みの深さに示した読みは、文学作品の鑑賞で用いられるこ
とが多く、本稿では読みの対象としない。また、c)音声の有無といった観点やd)他人と
一緒に本を読み、読書の体験を共有することも、本稿では読みの対象としない。

3. なぜ読書をするのか

昨今、スマートフォンの普及により、日常生活の中でインターネットに接する時間が極
めて長くなっている。検索サイトで調べたいキーワードを入力すれば、瞬時に、知りたい
情報を得ることが可能である。しかし、インターネットによる情報収集は、情報の速報性
は高いが、信憑性に欠ける場合もあるので、注意が必要である。一方、書籍による情報収
集は、情報の速報性はないが、体系的に情報を得ることができ、信憑性が高い。よって、
レポートを執筆する時に、書籍による情報収集が欠かせないことは言うまでもない。しか
し、2018年の読書世論調査では、全く書籍を読まない人は52%であり（毎日新聞 2019、
p. 5）、読書離れが続いていることがわかる。

読書の意味や意義について、多くの読書家が多様な表現を用いて説明しており、枚挙に
暇がない。一冊の著書の中においても、読書の意義は表現を変え、繰り返される場合も多
い。そうした意味において、筆者が引用した表現が著者の核心に迫った表現ではない可能
性もあることを断っておく。以下に、読書の意義に関する記述の一部を提示する。

1) 読書は「生きる力」であり、読書行為を通して常にエネルギーを供給しなければ、年々
衰えていく。生涯にわたって本を読むことが、生きる力の源泉であり、自らの生活をつ
くり続けていくための最良の方法である（塚田 2014、p. 5）。

2) 読書は「頭の栄養」である。人生のクオリティ（質）を高めるには、本で学ぶことが大
切である（橋爪 2017、p. 3、p. 10）。

3) 正しい読書法を身につければ、人生を2倍、3倍豊かにすることができる。読書によっ

て数十人分の経験を身につけることができる (佐藤 2012、p. 4)。

4) 人生の豊かさは読書量できまる。限られた人生の時間の中で、本との出会いは、人との出会いと同じくらい貴重なものである (上岡 2019、p. 27)。

5) 日本は 20 世紀型の成長社会が象徴する「みんな一緒」という時代から、21 世紀型の成熟社会が象徴する「それぞれ一人一人」という時代が変わった。「それぞれ一人一人」の幸福をつかむための軸となる教養は、自分で獲得しなければならない。そのためには、読書が欠かせない (藤原 2015、pp. 132-133)。

1) と 2) は、読書を「生きる力」や「頭の栄養」と捉え、人がより良く生きていく上で欠かせないものとしている。3) と 4) は、人生を豊かにするために読書の必要性を述べている。1) から 4) は、一般論としてもよく聞くもので、より良い人生、豊かな人生を送るために読書が必要であると述べている。5) は社会の構造が変わったことにより、読書がより必要になったことを示している。次に、この点についてもう少し詳しく述べる。

藤原 (2015、pp. 132-143) は、第 4 章「正解のない時代を切り拓く読書」の中で、20 世紀と 21 世紀の社会構造で必要とされる思考の型 (学力) や能力について、図 1 のように対比している。20 世紀の日本の教育は、1 つの正解を早く正確に導き出し、パズルを誰よりも早く完成させられる少年少女を大量生産することを目指してきた。そこで、求められるのは「情報処理能力」で、決められた世界観の中でいち早く正解を導き出す力、「アタマの回転の速さ」であった。しかし、21 世紀の成熟社会では、自らビジョンを打ち出して道を切り拓いていかねばならない。そこで必要になるのは、レゴブロックのように、家をつくる、動物園をつくるなど自分が何をつくるのかを決め、一人一人が、自ら納得する答えである「納得解」をつくり出すことである。正解は 1 つではなく、答えとなる組み合わせ方は無限にある。こうした能力を藤原は「情報編集能力」と述べている。

この「情報編集能力」を身につけるための有効な手段の 1 つが本を読むことであるという。1 冊の本には著者が長い時間をかけて調べたことが書かれている。作品は作家の「脳のかげら」であり、その「脳のかげら」を、読者は本を読むことで自分の脳につなげることができるのだという。つまり、読書とは「他人の脳のかげら」を自分の脳につなげることである。多くの「他人の脳のかげら」をつなぎ、自分の見方を広げ、自分なりの「納得解」をつくり出すことが求められている。また、読書を通じて知識のインプットの蓄積をしていかなければ、自分の意見が出てこない。深く論理的な思考をする上で、読書は絶対に欠かせないものだと述べられている。

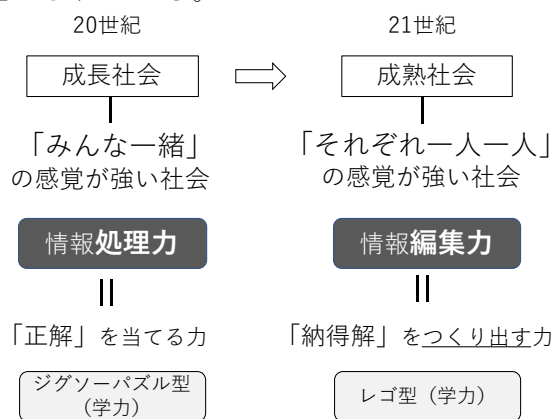


図 1 「成長社会」から「成熟社会」への転換 (藤原 2015、p. 134)

「読書とは『他人の脳のかげら』自分の脳につなげること」という表現は、筆者にとって、読書とは何かを説明する、最も腑に落ちる比喻表現であった。そして、自分なりの「納得解」が求められる成熟した社会では、読書を通じ、「他人の脳のかげら」をつなぐことによって、「納得解」が得られるという。この考えは、極めて興味深く、藤原氏に強く賛同する。

4. どのように本を読むのか

本の読み方についても、多くの読書家が様々な読書術を披露している。以下に示す3冊の著書からその技術を紹介する。これら3冊を紹介する理由は、主としてノンフィクションを対象にした情報読書に関して、具体的な読み方を提示しており、ARの読書指導をする上で参考に値すると考えるためである。

4.1 佐藤優 (2012)『読書の技法』東洋経済新報社⁽¹⁾

作家で、元外務省主任分析官である佐藤氏は、月平均300冊以上の本に目を通してという。この書籍は情報分析のプロである佐藤氏が自分の読書術について著したものである。この読書術の興味深い点は、時間を意識して読んでいる点である。「超速読」「普通の速読」「熟読」の3つの段階に分け、その段階ごとに読む時間の目安を設定し、読む本の重みづけをしている点が注目に値する。

まず、「超速読」は1冊を5分で読む「試し読み」で、本をどの程度丁寧に読むかを仕分けるための読みである。次に、「普通の速読」は新聞の読み方を応用したもので、全体に目を通し、1冊を30分で読む。なお、速読する場合には、当該分野の基礎知識がなければ速読できない。その場合は高校の教科書などで基礎知識を得る努力が必要となる。最後に、「熟読」は1ページ1分程の時間をかけ、基本書1冊を3回読む。読書後30分かけて読書ノートに記録する。読書ノートを作る時は時間をかけすぎず、正確な形でデータを引用し、コメントには何らかの判断（賛成、理解できないでもいい）と意見を書く。なお、読者が知りたいと思う分野の基本書は、3冊もしくは5冊購入すべきだと述べている。それは1冊の基本書だけに頼ると、学説が偏っていた場合、後でそれに気づいて知識を矯正するには時間と手間がかかるためだという。以下に、3段階の読みを紹介する。

<第1段階「超速読」の技法> (1冊5分)

[目的] 試し読みで、全体の印象をつかみ、熟読に値する本かを見極める。「自分で理解ができる本」と「理解ができない本」に分ける。前者は、書籍を「熟読するもの」「速読するもの」「超速読するもの」に仕分けする。

[方法] 1) はじめに「」の1ページと目次を読み、あとはひたすらページをめくる。

2) 文字は読まず、見出しやキーワードを頭に焼き付ける。

3) 気になる箇所や語句は印をつけ、ポストイットを貼る。

4) 結論の1ページを読む。

<第2段階「普通の速読」の技法> (1冊30分)

[目的] 内容を大雑把に理解・記憶し、本のどこに何が書いてあるのかを頭に入れる。内容を100%理解しようとする完璧主義を捨てる。

[方法] 1) 「はじめに」と目次を注意深く読む。

- 2) 「おわりに」を読み、読むべき部分を見つける。
- 3) 読むべき部分は文字をできるだけ速く目で追う。(1 ページ 15 秒程)
- 4) 気になる箇所には印をつける。
- 5) それ以外は超速読の方法で読む。
- 6) 重要なものはノートに読書レポートを作成する。

<第3階「熟読」の技法> (1 ページ 1 分程)

[目的] 当該分野の基本知識を身につけ、強化する。本当の知識を身につけるために、重要なことは、知識の断片ではなく、自分の中にある知識を用いて、現実の出来事を説明できるようになることだ。そのためには、3 回読む。

[方法] 1) 本の真ん中位を読む。

- 2) 鉛筆、消しゴム、ノートを用意する。
- 3) 鉛筆で印をつけながら読む。
- 4) 本に囲みをつくる。
- 5) 囲みの部分をノートに写す。
- 6) 結論部分を 3 回読み、もう一度通読する。

[要点] 基本書は最低 3 回読む。第 1 回目は線を引ながらの通読、第 2 回目はノートに重要箇所の抜き書き、第 3 回目は再度通読。

4.2 上岡正明 (2019) 『高速読書』アスコム

上岡氏はコンサルティング会社の社長で、脳科学的なアプローチを用いた「高速読書」を提唱している。読む際に、明確な目的や願望をもち、1 回目 15 分、2 回目 10 分、3 回目 5 分、時間を空けて、場所を変えて読む読書術を提唱している。それは脳科学で明らかになっている「分散効果」、「エピソード記憶」、「アウトプット」を駆使した読書術である。例えば、「分散効果」を生むために、時間を空けて読む。「エピソード記憶」が活性化するように、読んでいる時に感じたことを本に書き込んだり、線を引いたりする。読んだ後、ノートに「アウトプット」することで、脳は長期記憶として保存することを指す。

従来、「速読」はひたすら速く、多く読むことが目的であったが、覚えていないことも多く、そうなれば無意味である。一方、「高速読書」は多く読んで記憶に定着させるのが目的であるため、得た知識を仕事や生活に生かせるという。このように 30 分で記憶に残る読み方ができるならば、その読書術を習得したいものである。以下に、「高速読書」の読み方を示す。

<高速読書 1 回目> (15 分)

- 1) タイマーをセットして一気に読み始める。
- 2) カバーと帯だけはチェックする。目次、あとがきは読まない。
- 3) 漢字だけ読む。ひらがなで重要視するのは「逆説の接続詞」。
- 4) 「つまり読み」: 主張は何かを考え、「つまり何？」と大事な部分を探しながら読む。
- 5) 大切なところはドッグイヤー (ページ角の折り目) をつける。

<高速読書 2 回目> (10 分)

- 1) ドッグイヤーのページを中心に読む。
- 2) ありのままの感情を本にぶつけ、青ペンでメモを書き、記憶に残す。

<高速読書 3 回目> (5 分)

- 1) 青ペン個所を中心 (全体の 10% くらい) にアウトプット法を考えながら読む。
- 2) 本で得た知識をどう自分の行動につなげるかを考え、青ペンで本に書いていく。

<アウトプットノート>

- 1) 知識を自分の血肉にするためのもので、時間をかけてはならない。
- 2) 1 つの要点は 20 字以内にまとめ、自分の仕事にどう役立てるか、考える。
- 3) ノート項目は次の通りである。
 - ① 読書の目的
 - ② 書誌情報 (書名、著者、出版年、出版社)
 - ③ 本のエッセンスを 20 字以内で箇条書きにする。例) 過度な愛情はお節介になる。
 - ④ 行動プランやアクションプランを箇条書きにする。

4.3 西岡吉誠 (2018) 『「読む力」と「地頭力」がいきなり身につく東大読書』 東洋経済新報社

著者の西岡氏は東京大学の学部生で、考える力をつけるために自分が発見した読み方の読書術を著した。それは能動的な読書で、次の 5 つの能力を伸ばす読み方である。

- 1) 読解力：素早く、かつ正しく文章の内容を理解し、文章を読み込んで理解する力
 - ① 「装丁読み」：装丁 (カバーや帯) から情報を付箋に書き、本の見返りに貼る。
 - ② 「仮説作り」：何が書かれているのか仮説を立てて、自分が何を学ぶのか目的をはっきりさせる。「目標」→「道筋」→「現状」を付箋にまとめ、貼る。
- 2) 論理的思考力：より深くその文章を理解し、論理の流れを迫るようになる力
 - ③ 「取材読み」：優れた読み手は「記者」になる。「記者」は相槌を打ちながら、質問を考えながら、時にはメモを取りながら、筆者の話に耳を傾ける。
 - ④ 「質問読み」：「どうしてこうなんだろう」「なぜこう言えるんだろう」と常に質問を考えながら読む。「質問」を考えずに読んでも「知識」が得られない。
 - ⑤ 「追及読み」：誰も答えてくれないけれど疑わしいこと (疑問) をもって読むこと
- 3) 要約力：「一言」で説明できる力
 - ⑥ 「整理読み」：情報を整理して、著者が何を伝えたかったかを一言で言い表すこと
本は「魚」であり、「身」と「骨」がある。「骨」は言いたいこと、「身」はそれを補強するものの例えである。筆者が言いたかったことが何なのかを理解して初めて、自分の意見が作れ、「自分で考える」ことができる。
 - ⑦ 「要約読み」：「骨」が残っていることを確認する。「要するに何？」を短文で示す。
1 章の要約文を探す。1 章を 30 字以内でまとめる。本を 140 字以内でまとめる。
 - ⑧ 「推測読み」：「骨」がわかれば、次に何が来るかを推測できる。
展開の型として多い 4 つ「例示」「比較」「追加」「抽象化・一般化」を駆使する。
- 4) 客観的思考力：さまざまな視点からの意見、多角的なモノの見方をもつための力
 - ⑨ 「検証読み」：1 冊の本から多くのインプットが得られるのは「同時並行で複数の本を読む」読み方。こう読めば、「意見の偏り」や「受け身の読書」を避けられる。
 - ⑩ 「パラレル読み」：同じ分野について別の切り口で書かれた 2 冊の本を読み、共通点と相違点を探す。後に相違点の理由を考えて読む。

⑪「クロス読み」:「パラレル読み」の中で「意見と意見が交錯するポイント」を見つける読み方を指す。

5)応用力:得た知識を他のところにも活かせるように、自分のものにする力

⑫「議論読み」:「本を読んだ感想」を言葉にすることも立派な議論である。

a) 仮説が本当に外れなかったのかを確かめる「答え合わせ」

b) よりコンパクトな要約を行う「アウトプット要約」

c) 今までの全ての読解をふまえて感想・意見をアウトプットする「自分なりの結論」

上述の読書術は、著者が提案している全ての「読み」に名称をつけていることに特徴がある。1つ1つの読みにも名称を付けているため、着目している読み方は何であるのか、理解しやすい。例えば、2)「論理的思考力」を伸ばす読み方の1つに③「取材読み」がある。これは優れた読み手は「記者」のように、相槌を打ちながら、質問を考えながら、時にはメモを取りながら、筆者の話に耳を傾けることを指している。記者が取材するように、書かれた文章に対して質問したり、追求したりしながら読むという例えは、論理的に読むと説明されるより理解しやすいと思われる。これらの読み方が実践できれば、主体的に読むとはどのようなことか、体験できよう。

5. まとめ

本稿では、日本語教員が日本語のリーディング科目で読書指導を行うことを念頭に、情報読書における読書の意義と読書の方法について、筆者が興味深いと判断した読書論を示してきた。

まず、読書の意義について述べる。「生きる力」や「豊かな人生」のために読書をするという読書の意義はもったもたでも、それだけで学習者が積極的に読書活動に取り組むとは思えない。筆者にとって、最も説得力があった読書の意義は、藤原(2015)によって示された社会構造の変化により、今まで以上に読書の必要性が高まっているという考えである。藤原(2015)において、読書は「他人の脳のかげら」を自分の脳につなげることと捉えられている。これは読書を通して著者の個人的な体験を体験することで、読者の知識に代えていく過程を表現している。次に、21世紀の成熟社会は20世紀の成長社会と異なり、決まった正解はなく、これが正解と考える自分なりの「納得解」を得る必要があるという。そして、読書を通じて知識のインプットの蓄積をしていかなければ、自分の意見を述べることができないという。つまり、自分の考えを構築し、自分の「納得解」を導く上で、読書は絶対に欠かせないものと位置づけられている。学習者がこうした意義を明確に認識していれば、主体的に読書活動に取り組むであろう。

次に、読書の方法について述べる。西岡(2018)を中心に、佐藤(2012)と上岡(2019)が提示している読書術から次の5点を挙げる。

- 1) 本文を読む前の技術: 読書の前に、どのような情報や知識を得たいのか、読む目的を決める。本文を読む前に「装丁読み」、目次、はじめに、あとがきに目を通す。
- 2) 読書中の読むスキル: 本文を読む時に、「取材読み」、「質問読み」、「要約読み」などを駆使し、下線、付箋、ドックイヤー、書き込みを行い、主体的に筆者の声を聞き取る。
- 3) 得た知識のアウトプット方法: 本から得た知識を自分のものにするためには、「議論読み」を行い、時間をかけず、ノートなどに記録を取る。

- 4) 読書時間：読書時間について、具体的に読む時間を設定する。読書時間や読み方を変えて3回読めば、理解を深められる。
- 5) 同じテーマの本の「パラレル読み」：テーマについてより理解を深めるためには、同じテーマの本を複数読む「パラレル読み」を行う。

私たちは本を読む時、自分がどのような読書術を使って読んでいるのか、認識していないことが多い。そこで、まず、その読み方を振り返り、自分の読み方を認識することが重要である。そして、さまざまな読書術を知り、それらの読書術を必要に応じて取り入れることができれば、より深く内容を理解できるだろう。読書に対する明確な意義と具体的な読書術を知り、それを実践できれば、読書活動が活発になり、先行きが見えない社会においても、自分の進むべき道を自分で切り拓くことが可能になるだろう。そのためには、日本語のリーディング科目において、読解指導だけでなく、読書指導が期待される。

(脇田里子わきたりこ・同志社大学・oriko@cup.com)

注

1. 佐藤（2012）の他に、池上・佐藤（2016）において佐藤氏が述べている本の読み方も参考にしている。

謝辞

本研究は科研費基盤研究(C)（課題番号 17K02873）の助成を受けて行った研究の一部である。本研究の遂行にあたり、研究協力者である村上康代氏から貴重な意見をいただき、ここに深謝の意を表す。

参考文献

- 栗野真紀子・川本かず子・松田緑編（2012）『日本語教師のための多読授業入門』アスク
- 池上彰・佐藤優（2016）『僕らが毎日やっている最強の読み方』東洋経済新報社
- 上岡正明（2019）『高速読書』アスコム
- 佐藤優（2012）『読書の技法』東洋経済新報社
- 塚田泰彦（2014）『読む技術－成熟した読書人を目指して－』創元社
- 西岡壱誠（2018）『「読む力」と「地頭力」がいきなり身につく東大読書』東洋経済新報社
- 橋爪大三郎（2017）『正しい本の読み方』講談社現代新書
- 藤原和博（2015）『本を読む人だけが手にするもの』日本実業出版
- 毎日新聞社（2019）『2019年版読書世論調査』毎日新聞社
- 八木雄一郎（2019）「読解指導と読書教育」『読書教育の未来』ひつじ書房，169-177.